

JAPAN ICOMOS / INFORMATION

INTERNATIONAL COUNCIL ON MONUMENTS AND SITES

JAPANESE NATIONAL COMMITTEE 日本イコモス国内委員会

5期—7号



2003.04.30

CONTENTS ♣

はじめに／前野まさる 01

President's Message

Masaru MAENO

2002 年次第4回拡大理事会報告 (1/11) / 宗田好史 02

Report on the 4th Meeting of the JAPAN/ICOMOS Executive Board, 2002

Yoshifumi MUNETA

日本イコモス国内委員会 2002 年次総会記録 / 前野まさる 04

Record on the General Meeting of JAPAN/ICOMOS, 2002

Masaru MAENO

第13回 ICOMOS 総会および

国際専門分科委員会報告 (スペイン・マドリッド) 12

Reports on the 13th ICOMOS General Assembly and
the International Committee Meetings in Madrid, SPAIN

執行委員会・総会 / 西村幸夫 12

Executive Committee Meetings and the General Assembly

Yukio NISHIMURA

国際専門分科委員会 14

International Committee Meetings

歴史的庭園及び文化的景観 / 杉尾伸太郎 14

Historic Gardens and Sites

Shintaro SUGIO

文化の道 / 杉尾邦江 14

Cultural Corridors

Kunie SUGIO

トレーニングおよび危機管理 / 稲葉信子 15

Training and Risk Preparedness

Nobuko INABA

考古遺産管理運営 / 岸本雅敏 17

Archaeological Management

Masatoshi KISHIMOTO

イコモス総会とシンポジウムの感想 / 大河直躬 18

Naomi OHKAWA

イコモス第13回総会出席報告 / 佐々波秀彦 20

Hidehiko SAZANAMI

ICOMOS マドリッドでの雑感 / 西浦忠輝 21

Tadateru NISHIURA

お知らせ 22

日誌 / 事務局 26

Diary

はじめに
前野まさる



2002年12月のマドリッドICOMOS総会後風邪をこじらせ、全てが停滞し、JAPAN / ICOMOS INFORMATION 誌の発行も予定の期日に間に合いませんでした。お詫び申し上げます。

第13回ICOMOSジンバブエ総会の準備が整わないとの本部の判断で、会場が急にスペインのマドリッドに変わり、本年あらためて第14総会としてジンバブエで開催することになりました。ジンバブエ総会の日取りも10月下旬に決まったようです。

ところでマドリッド総会の一番の目的は、ICOMOS 役員選挙です。選挙の結果委員長は Michael Petzet (ドイツ)、5人の副委員長の一人に西村幸夫さんが当選し先ずほっとしたことでした。選挙は票計算に手間取り、全ての選挙が終わったのは午前1時を廻っていました。

日本イコモス国内委員会 2002 年次総会は、2003年1月11日にずれこみ、東京芸術大学の講義室をお借りして開催し、併せて稲葉信子さんと工楽善通さんをパネラーに研究会を開催しました。事務局の活動全般では、我妻事務職員の懸命の努力と山田編集委員、矢野事務局長、杉尾副委員長の支えで順調に動いています。

本年度から事務職員が我妻綾子さんから水口泉さんに交代しましたことをご紹介しますと共に、我妻綾子さんに深く感謝し、ご健康をお祈りします。

2002年次第4回理事会(拡大理事会)議事録

開催日時：2003年1月11日11時から

開催場所：東京藝術大学美術学部第5講義室

報告事項

議案書に基づいて、前野委員長から順次以下の報告がなされた。

1) 2002年次諮問委員会(11月27～29日)及び第13回ICOMOS総会に関する報告

(1) Heritage at Riskの出版に関する報告、危機にある遺産は、東ヨーロッパ諸国では大きな問題であり、この出版の意義はあるものの資金不足で遅れている。米国のGetty財団とドイツの財団に資金協力を依頼している。

(2) 役員選挙について、委員長選挙に関してドイツ政府が動いたことへの批判があった。次回選挙から候補者の資格審査をすべきとの提案があったことが報告された。

(3) 役員の選挙結果は、委員長：Michael Petzet(ドイツ)、事務局長：Dinu Bunbaru(カナダ)、財務部長：Giora Solar(スペイン)、副委員長：Gustavo Araoz(米国)・Sheirdan Burke(オーストラリア)・Carlos Pernault・西村幸夫(日本)・Christiane Schmockle-Mollard(フランス)の5氏がそれぞれ選出された旨、報告された。

2) 2002年度の理事会の報告

本年次は4回の理事会が開催され、ICOMOS総会開催地がジンバブエからマドリッドに変更され12月に遅れたこともあり、第4回目1月になった旨報告され、また奈良で第2回が開催されたことも報告された。

3) 会員の入退会に関する報告

会員担当の杉尾理事が以下の報告をした。本年次は、個人会員24名の入会、維持会員3企業、退会6名の申請が受理・承認され、2003年次本部登録会員数は233名になる旨が報告された。内、維持会員については、今理事会でさらに7企業にまで増加する。

4) 国際専門分科委員会に関する報告

前野委員長から資料に基づいて、日本が代表を選っている15の各国際専門分科委員会に関して各代表委員から国内委員会に届いている報告をまとめ、現況の詳細な説明がなされた。今年度はこの内10国際専門分科委員会に代表が出席した。またその一部、出席している理事が勤める専門分科委員会についての説明も付け加えられた。

5) 国内小委員会に関する報告

現在設置されている5つの小委員会について、今年度の活動報告がなされた。特に、第5小委員会「プロヴディフ旧市街保存事業協力班」については、石井昭主査(日本イコモス国内委員会顧問・前委員長)から次の通り詳細に報告がなされた。若干の遅延があったものの漸く順調に動き出しつつあり、この事業の重要な意義に鑑み、出席者一同今後の期待を新たにされた。

◆第5小委員会(プロヴディフ旧市街保存事業協力班)の近況

石井主査から以下のように報告された。

[現状] 昨年(2002年)の6月から9月にかけて UNESCO Mission(委員6名)が作成した「事業計画書」"Conservation of Monuments in the Ancient Plovdiv Reserve"では「重要建造物の応急修理を厳しい冬が到来する前に実施すべきであろう」との共通認識から事業の開始時期を「2002年10月」と予定していたが、すでにその時期を2か月以上も過ぎてしまった。現地の関係者はもとより、我々もまた、ユネスコあるいは日本外務省から正式決定の通知が届くのを待ち続けているのが現状である。

[経過] 前回拡大理事会以後の主な経過は次の通り。

(1) Bulgarian-Japanese ICOMOS Joint Working Groupは初会合に備えて10月中頃から議案の具体的検討に入った。石井主査とT.Krestev主査とがこの件で幾度かメールを交わした。(2) 10月31日、矢野委員が日本イコモス事務局長の立場で外務省の担当官・金子氏と協議した。「外務省にはまだ事業計画書が届いていない。届いたら連絡する」との応答があった。(3) 下って12月10日、石井主査がユネスコの担当官 A.Lemaistre氏にメールを送り、



ICOMOS Joint Working Group がユネスコからの通知を待ち侘びている旨を伝え、決定までの手順・日程・等を知らせて欲しいと頼んだ。速答は来なかった。(4) 12月12日、矢野・麗・石井各委員が金子氏(外務省)から「……本日ユネスコより『プロヴェディフ保存事業』の事業案がようやく提出されて参りました……。今後当方にて精査させていただくこととなります。……」との書簡と共に事業案(=計画書)の写しを受領した。その内容(本文・図・表など)は我々が9月中旬頃に校了したものと全く同一ながら一たぶんユネスコによる事務的措置であろう一表紙に示された1行だけが“Starting date : Beginning 2003”と書き直されていた。

(5) 昨日(1月10日)、A.Lemaistre氏(ユネスコ)から遅い返事が来た。「日本政府の回答をまだ受け取っていないが見通しは明るい」旨を述べ、続けて“I know this suspense is quite painful but normal”とあった。

(文責:石井 昭)

6) 日本 ICOMOS 国内委員会 2002 年次会計報告

2002年次の会計報告が、矢野事務局長よりなされ、理事会で承認された。

審議事項

1) 会員の入退会

資料の通り、一般会員7名の会員の入会が承認された。また、維持会員として、「国宝松本城を世界遺産に」推進実行委員会の入会が諮られ、その事情を益田理事が説明した後、審議の結果、承認された。次に、退会者1名について資料の通り諮られ、承認された。

2) 総会議案書に関わる「年次活動報告」、「年次活動方針」の審議

引き続き行なわれる総会に提案される「2002年次活動報

告」及び「2003年度活動方針」の審議を行なった。各担当理事から、資料に基づき説明がなされた後、承認された。

3) 総会議案書に関わる「小委員会活動報告」並びに「同活動方針」の審議

引き続き行なわれる総会に提案される「2002年次小委員会活動報告」及び「2003年度小委員会活動方針」の審議を行なった。第一～第三小委員会については前野委員長が、第四小委員会については稲葉主査及び宗田主査代行から、第五小委員会については石井主査から説明がなされた後、承認された。

4) 国際専門分科会委員会に関する活動報告と活動方針の審議

Historic Gardens及びCultural Corridorについては杉尾理事から、Woodsについては伊藤代表に代わり前野委員長から、Cultural Tourismは宗田理事から、Stone及びVernacular Architectureについては前野委員長から、それぞれ報告され、審議の結果了承された。

協議事項

1) 国際専門分科委員会への今後の対応について

Trainingに関する国際専門分科委員会の代表である稲葉理事から、アジア諸国とのネットワーク作りの必要性が述べられ、その具体化に向けて、Structure 国際専門分科委員会への代表である日高理事と合同で作業に当たりたい旨提案され、協議の結果、その支援に努めることとなった。

以上で、理事会を終了する旨、前野委員長が宣言し、拡大理事会は終了した。13:05

日本イコモス国内委員会 2002年度総会記録



1月11日の総会

開催日時：2003年1月11日13時半から
開催場所：東京藝術大学美術学部第5講義室

報告事項

1) 2002年次一般報告 委員長 前野まさる

2002年次総会は第13回ICOMOS総会がジンバブエからスペインのマドリッドに変更になったことから、開催が12月初めにずれ込んだために、日本イコモス総会会場の確保と時期の決定が難しくなり、場所と時期の決めやすい芸大と言うことになりました。毎回会場が一定していなくて、ご不便をおかけいたします。

以下本年次の日本イコモス国内委員会の活動概況についてご報告いたします。

本年は暮も押し迫った12月にスペインのセビリアで諮問委員会が、また、マドリッドで第13回総会が開催され、お知らせすることが多くあります。

1. 諮問委員会・総会について

諮問委員会(11月27日～29日)の報告・協議事項の要点は次の通りです。

出版ではHeritage at Riskの出版報告、また、Heritage at Riskは東ヨーロッパの大きな問題であるとの意見もあり、この出版の意義が述べられました。その他の出版について資金不足で遅れていること、アメリカのGetty財団とドイツのある財団が資金協力を願っていることなどが報告されました。

選挙については、ある一部のICOMOSから委員長選挙に政府が動いていることに不公平であるとの批判がありました。今回は選挙が間近であるので不問とし、次回より候補者の資格審査をすべきではないかとの提案もありました。

選挙結果は次の通りでした。

委員長:Michael Petzet (ドイツ) 事務局長:Dinu Bunbaru (カナダ) 財務部長:Giora Solar (イスラエル) 副委員長:Gustavo Araoz (アメリカ)・Sheirdan Burke (オーストラリア)・西村幸夫(日本)・Carlos Pernault (アルゼンチン)・Christiane Schmockle-Mollard (フランス) の5氏

2. 理事会

[会議] 本年次の拡大理事会は第1回/3月23日東京文化会館中会議室 第2回/6月15日奈良学セミナーハウス 第3回/10月12日東京文化会館 第4回/本日1月11日東京芸術大学 以上4回開催しました。第1回の議事は既に[JAPAN ICOMOS INFORMATION]誌の第5期1号、第2回は2号に、第3回は3号に掲載いたしました。

3. 会員

本年初頭のICOMOS本部登録の個人会員は214名です。

[入会・退会] 本年1年間に理事会で申し込みを受理・承認した個人会員入会者は24名、維持会員には3企業、退会者は5名(内2名はご逝去)で、2003年次の本部登録会員数は233名になる予定です。この件については本総会において承認をお願いいたします。

4. 専門分科委員会

ICOMOS傘下に、現在総数22の国際専門分科委員会が設けられています。日本イコモス国内委員会からは現在15専門委員会にVoting MemberおよびAssociate Memberを送っています。

[国際会議] 2002年に開催された専門分科委員会のAnnual Meeting, Symposium等のうち、日本イコモス代表委員が出席したのは、次の11件でした。

① INTERNATIONAL STONE COMMITTEE (ISC)

2002/1 フランス 西浦忠輝氏

② HISTORIC TOWN AND VILLAGES (CIVV)

2002/4/18 ギリシャ/コルフ 福川裕一氏

③ WOOD COMMITTEE 2002/9/25 ~ 29

ロシア/ケネゼロ 伊藤延男氏

④ HISTORIC GARDEN AND SITES

2002/11/30 ~ 12/4 スペイン/マドリッド 杉尾伸太郎氏

⑤ CULTURAL CORRIDORS 2002/12/4

スペイン/マドリッド 杉尾邦江氏

⑥ TRAINING 2002/12/3

スペイン/マドリッド 稲葉信子氏

⑦ STONE 2002/12/4



スペイン／マドリッド 西浦忠雄氏

⑧ RISK 2002/12/4 スペイン／マドリッド 稲葉信子氏

⑨ VERNACULAR ARCHITECTURE 2002/12/4

スペイン／マドリッド 前野まさる

⑩ ARCHAEOLOGICAL MANAGEMENT 2002/12/4

スペイン／マドリッド 岸本雅敏氏

その他国際会議

⑪ 韓国 UNESCO・ICOMOS 主催合同国際会議

2002/11/20 韓国／ソウル 参加国：韓国 UNESCO・
ICOMOS、日本 ICOMOS(前野まさる)、中国 ICOMOS

①②の報告は5期4号に、③の報告は5期6号の「JAPANESE ICOMOS INFORMATION」誌に掲載してあります。④～⑩については次号に掲載の予定です。今後とも国際会議にご出席の折にはどうぞニュースをお寄せ下さい。

5. 小委員会

日本イコモス規約第25条2項にもとづいて今期理事会が設置した小委員会は次の5者です。

第1小委員会(文化財保護関連憲章研究班)

主査：藤井恵介氏 全8名

第2小委員会(出版協力・文化講座協力・他)

主査：羽生修二氏 全3名

第3小委員会(歴史的建築物構造補強研究班)

主査：日高健一郎氏 全8名

第4小委員会(世界遺産条約関連問題研究班)

主査：宗田好史氏 全6名

第5小委員会(プロパティフ旧市街保存事業協力班)

主査：石井 昭氏 全5名

6. 研究会・後援事業

本年の研究会及び後援・協力事業は次の通りです。

*2002年2月21日 「東アジア歴史的都市保存・再生に関する地域セミナー」／日本建築学会(後援事業)

*2002年5月11日 「インド・グジャラート地方震災後の文化遺産に関する調査研究計画報告会」／日本建築学会(後援事業)

*2002年6月16日 「平城京遺跡と高速度道路問題につ

いて」／国際奈良学セミナーハウスにて

*2002年6月28日 「南アジアの市民参加による歴史的遺産保存運動について」／東京芸術大学においてマニラ・アテネオ大学先端芸術主任レーネ・ハヴェラーナ氏

*2002年7月11日 「土の建築_その伝統と世界性」／ウベール・ギヨ教授の講演、金沢大学・土構造物(アドベ)(後援事業)

*2002年10月5日 「飛鳥時代の庭」歴史的庭園及び文化的景観国際分科会／奈良県立万化会館にて

7. 広 報

これまでと同様、本年もまた、事務局が中心となって力を注いだのは、会員全員を等しく対象とする広報活動であった。まず、JAPAN ICOMOS INFORMATION誌において、総会報告、理事会報告、研究会報告、国際専門分科委員会活動報告などの諸報告、日常の会務を記録した事務局日誌、各種の情報などを掲載した。また一方、総会ははじめ、各種の研究会や見学会などの開催通知、US/ICOMOS INTERNSHIP PROGRAM参加者募集通知などは、会員各位に直接郵送した。

[JAPAN ICOMOS INFORMATION] 誌について



過去1年間に第5期第3号(1月15日)、第4号(5月31日)、第5号(9月30日)、第6号(1月15日)と、計4回発行し、全会員に郵送した。誌面の内容は、上述した総会・理事会・研究会・国際専門分科委員会などの諸報告、事務局日誌、各種案内等がその大部分を占めたが、第4号では松本修自氏「無形文化遺産保存についての近年の動向」、上野邦一氏「京奈和自動車道が平城宮跡の地下を通る問題」、稲葉信子氏「イクロムへの2年の派遣任務を終えて」、第5号ではウベール・ギヨ氏・岡田保良氏「土の建築をめぐる将来プロジェクト」、第6号では山下王世氏「アガカーン文化トラストによる歴史都市サポート・プログラム」など国内外における文化遺産やその保存などをめぐる多彩な話題を掲載した。

2) 2002年次会計報告

(1) 日本イコモス国内委員会 2002年次会計報告 (2001/12/8~2002/12/7)

1. 繰越金	普通預金	426,255 円
2. 収入		
	会員費	2,180,000 円
	98年~2001年	210,000 円
	2001年分	1,930,000 円
	2003~4年分	40,000 円
	維持会員費	350,000 円
	普通預金利息	23 円
	定期預金利息	5,021 円
	事業収入	40,000 円
	研究会参加費	0 円
	寄付金	244,000 円
	雑収入	3,000 円
	合計	2,822,044 円
3. 支出		
	ICOMOS 本部年会費 (40\$/人×178人)	1,069,792 円
	会議費 (総会・理事会)	99,610 円
	研究会費	79,568 円
	渡航費補助	0 円
	通信費	424,791 円
	[INFORMATION]誌編集・印刷料(3回)	707,544 円
	事務用品費	62,027 円
	事業費	0 円
	事務局人件費	600,000 円
	慶弔費	10,000 円
	合計	3,053,332 円
4. 残高	普通預金(繰越金+収入-支出)	194,967 円
5. 基金	定期預金 (イコモス研究振興基金)	12,550,000 円

以上の通り報告します。2003年1月11日

会計担当理事 吉田綱市  矢野和 

会計監査欄

2003年1月11日

監事 



審議事項

1) 新規入会者及び退会者の承認

理事会は2002年中に下記の通り24名の個人会員と3企業の入会及び6名の退会を承認した。(日本イコモス国内委員会規約第7条) 敬称略

個人会員

入会者	現職	推薦者
(第1回拡大理事会・3月23日・4名)		
堀内正昭	昭和女子大学短期大学部生活文化学特助教授	岡田保良・山田幸正
小野健吉	奈良文化財研究所・文化遺産研究部主任研究官	杉尾伸太郎・杉尾邦江
岩崎好規	財)地域地盤環境研究所理事・所長	中川 武・矢野和之
宮城俊作	奈良女子大学生生活環境学教授	増井正哉・上野邦一
(第2回拡大理事会・6月15日・7名)		
チェスターリーブス	東京芸術大学大学院文化財保存学客員教授	前野まさる・矢野和之
兼松紘一郎	(株)兼松設計代表取締役	前野まさる・田原幸夫
金井 健	奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部	清水真一・松本修自
本田智子	(財)文化財建造物保存技術協会企画室	伊藤延男・村上誠一
福島綾子	ペンシルバニア大学芸術大学院 文化財保存コース修士課程	田中 淡・矢野和之
重山郁子	宮崎県教育委員会事務局文化課	矢野和之・甲斐章子
中井 泉	東京理科大学理学部応用化学科	岡田保良・矢野和之
(第3回拡大理事会・10月12日・6名)		
高島忠平	佐賀女子短期大学副学長・教授	前野まさる・矢野和之
石崎武志	東京文化財研究所保存科学部	斎藤英俊・西浦忠輝
山内和也	シルクロード研究所	岡田保良・山田幸正
辻村国弘	TBS-L制作本部(世界遺産の「わりのり」制作)	前野まさる・矢野和之
土本俊和	信州大学工学部教授	前野まさる・矢野和之
山下王世	マサチューセッツ工科大学(マサチューセッツ工科大学)	西浦忠輝・岡田保良

(第4回拡大理事会・2003年1月11日・7名)

岡本武憲	宮城県日南市教育委員会	前野まさる・矢野和之
ジャンク(イ・ダ・アロ・ナ・ナ)	筑波大学芸術学部学術修士課程	岡田保良・日高健一郎
大国晴雄	鳥取県大田市石見県山課課長	前野まさる・矢野和之
篠野志郎	東京工業大学総合理工学研究所教授	前野まさる・岡田保良
黒野弘靖	新潟大学工学部建設学科助教授	矢野和之・高本浩志
田川 肇	長崎県教育庁学芸文化課文化財指導官	工藤善通・矢野和之
矢谷明也	舞鶴市役所建設部建築住宅課	矢野和之・三宅理一

[維持会員]

(第1回拡大理事会・3月23日・2企業)

(株)尾田組	(総合建築業代表者・尾田芳信)	杉尾伸太郎・前野まさる
(株)鴻池組	(総合建築業代表者・鴻池 一季)	前野まさる・矢野和之

(第4回拡大理事会・1月11日'03)

[国宝松本城を世界遺産に] 推進実行委員会 益田泰房・矢野和之

退会者	事由
(第1回拡大理事会・3月23日・1名)	
アントレ・ケルシェフスキ	3月5日に退会希望の書面を受領
(第3回拡大理事会・10月12日・4名)	
足立富士夫	6月4日ご逝去
佐原 真	7月10日ご逝去
横山浩一	8月12日に退会希望の書面を受領
都出比呂志	8月13日に退会希望の書面を受領

(第4回拡大理事会・2003年1月11日・1名)

青柳洋治 12月10日に退会希望の書面を受領

2) 2003年次活動方針

◆活動全般

事務局体制も整い、我妻事務職員の懸命の努力と山田編集委員の活躍で事務局は順調に動いています。一方、それぞれ委員の属している外部の保存関係の組織に近年国際交流が進み、国内で国際会議を持たれることが多くなりま

した。これらの組織から日本イコモス国内委員会の協力要請や、後援依頼も増え、本会としても日本国内で国際会議を企画する要請があり、こうしたことに対する対応も整えなければならぬと思います。(前野まさる)

◆渉外担当

自然遺産に比べ、文化遺産、とりわけ不動産文化遺産の保存は、地元の政治や経済などの要素がからみ複雑で難しく、保存を訴える側が弱かったのが常ですが、少しずつ変わってきているように思います。とりわけ世界遺産条約の普及に伴って、イコモスが組織としてこれに関わらざるを得ない場面も、国内外を問わず増えていくと思われます。また、これは目新しいことではありませんが、英語圏以外の国からの情報の発信、イコモス本部の活動への積極的な参加、他国の国内委員会との交流が望まれています。会長、事務局、理事の方々との密接な連携のもと、これらに適切かつ迅速に対処していきたいと思っています。(稲葉信子)

◆会員担当

2002年度は維持会員も多数入会いただきました。さっそく、日本イコモス国内委員会での活動へのご協力ありがとうございます。なお入会にあたってご紹介の労を取っていただいた委員の方々に厚く御礼申し上げます。

また個人会員も相当拡充できました。錚々たる方々の入会誠にありがたく歓迎致しております。早速のご活動につきましても感謝申し上げます。

しかし、まだ当委員会の活動を活発たらしめるだけの維持会員、会員の数には至っておりません。したがって2003年次も会員担当理事以外の理事の方々にはぜひご協力をお願い致し、会員の増強、特に立派な維持会員のご推薦方につきよろしくお引き回しの程、お願い申し上げます。

また、一方では活動の内容が新しい会員にとつての魅力がありますから、また国際会議等の活動等につきましても一層充実していただくようお願いする次第です。

おわりに、会員担当理事2003年次も大いに努力するつもりであります。今期の会員各位のご協力、ご援助お願いできれば幸いです。(杉尾伸太郎)

◆事業担当

イコモスとしての事業

ICOMOSはその創立以来、各国の個別の状況に配慮しつつも、「ヴェニス憲章」をその倫理的規範として、文化遺産の国際的保存活動を展開してきました。21世紀を迎えた現在、世界の国々は情報化の波の中ですますその距離を縮め、一方DOCOMOMOを始めとする各種の新たな国際的運動が展開されつつあります。しかしこうしたなかでもICOMOSは依然として、UNESCOを中心とする世界の文化遺産に関わる国際的活動の重要な母体として、中心的に機能しつづけることが必要だと考えております。

日本イコモスにおいても、“日本の保存”と“世界の保存”を繋ぐ貴重な「窓口」としての役割が今後ますます期待されていくのだと思います。情報が氾濫する現代だからこそ、歴史的にICOMOSが担ってきた、極めて理性的な国際的保存活動の流れを、さらに継承していくことが必要ではないかとも思います。

つまり日本イコモスの事業としては、“日本と世界を繋ぐ”役割を念頭に置いた事業計画が今後共々さわいものだと考える次第です。

近現代建築遺産 (Modern Heritage) について

筆者と関わりの深い標記のテーマにおける事業につき補足させていただきます。

第4期において「近現代建築の保存について考える」と題した研究会をシリーズで開催させていただきましたが、この研究会は今まで保存理念に関わることの少なかった民間の設計者に特に歓迎され、再開を望まれる方々もおられます。しかし以前のレポートでも述べました通り、私としては日本イコモス会員の皆様のニーズを先ず優先すべき、と考えております。ただ昨今、近代建築の保存については、官民ともに多くの具体的テーマを抱え、意欲的な保存プロジェクトも実施されるようになって参りました。2003年において具体的テーマで日本イコモスのニーズに合致するものがあれば、研究会を企画したいと思います。またこのテーマについては、DOCOMOMOやmAAANといったICOMOS以外の団体との協力も今後ますます重要なものになってくると思われます。こうした各種団体とのパイプ役としても充分役割を果たしていきたい



いと思っている次第です。(田原幸夫)

◆編集担当 (広報)

[JAPAN ICOMOS INFORMATION] 誌は昨年1年間で計4回発行された。新体制となった第5期の初年度後半において、編集等の不手際から発行が大幅に遅れ、年初の発行となった第3号では一つの誌面に複数の理事会報告が掲載されることとなった。今後、このような異常な事態を回避するために、編集・印刷を委託している業者を交えて協議・検討し、以下のような基本原則に沿って編集・発行の作業を進めていくことが、理事会においても承認された。1) 全体構成を原則、16ページとする。2) 毎号、各執筆者にあらかじめページ数を設定して原稿依頼を行なう。3) すべての原稿をとりまとめて、おおよそのページ・レイアウト・割付けを行ない、業者に渡す。4) 校正は1校までとする。5) できるだけ早期に発行計画を作成する。こうした編集作業の見直しの結果、その後は、応、理事会等の議論をタイムリーに会員各位に伝えるという最低限の役目は果たすことができた。しかし、必ずしも、発行計画が早期に検討されているわけではなく、ページ数を設定したうえで執筆者の方々に早めに原稿依頼ができていないわけでもない。また、基本的に電子投稿をお願いしているが、業者の編集ソフトとの対応などから文字化けや文章構成の乱れなどが生じたり、いまだに校正が不十分であったりしてご迷惑をかけている。また、誌面においては、本来の役割である理事会・研究会などの諸報告がその中心となってしまい、話題となる記事が乏しかった。そこで、来年度においても、[JAPAN ICOMOS INFORMATION] 誌を年4回程度、定期的に発行し、総会・理事会の報告、国内委員会が主催・後援する研究会、講演会、シンポジウムなどを中心に、その告知や報告、さらには事務局の会務記録などを、全会員にタイムリーにお伝えしたい。また、国内だけでなく世界各地で展開している文化遺産をめぐる諸問題や諸活動についての情報も可能な限り多くお知らせするよう努めたい。そのためにも、時宜をえた主題やその執筆適任者についての情報を、委員長はじめ役員・理事だけでなく、ひろく会員各位からも寄せていただき、年間にわたる早期の発行計画を策定したい。(山田幸正)

◆庶務担当

ICOMOS 国内委員会の NPO 化を目指していろいろ努力をしましたが、現 NPO 法の欠陥ともいえる海外に本部を持つ団体（特に会費を本部へ送金している）が認められないという壁に当たってしまいました。今後 NPO 法が改正されることを期待して、あきらめず法人化の道を探っていきたいと考えています。海外の ICOMOS の組織としての有り様について情報をお持ちの方は寄せて下さい。

また、事務局を切り盛りしていただき、長年御苦労をおかけしました我妻綾子氏がおやめになる予定となっております。新たな人材が必要となる訳ですが、この1、2ヶ月の間に決めていかなければならないと思っております。改めてここに我妻綾子氏に謝意を表したいと思っております。(矢野和之)

◆会計担当

昨年は会報 (JAPAN ICOMOS INFORMATION) の充実は図られましたが、年報を出すまでは至りませんでした。予算の目途がつかなかったからです。収入を挙げるには維持会員の拡充が望まれますが、昨今の景気の低迷からなかなか大変です。会員の皆様の協力を得て今年は重点的に行ないたいと考えています。なお会費が数年未納となっている方もあり、本部へ50%は送金していることから、かなり運営費を圧迫していることも問題といえます。

西村幸夫氏の紹介により、ユネスコ協会連盟から小学生向けの世界遺産に関する副読本のコンテンツづくりを依頼され、50万円程度の収入が見込めます。このような日本 ICOMOS で果すべき仕事があればご紹介頂きたいと思っております。(矢野和之)

[小委員会]

第1小委員会 (文化財保護関連憲章研究会)

若い人を交えオーセンティシティ問題のついて検討を深めたいと考えています。(主査・藤井恵介/全8名)

第2小委員会 (出版協力・文化講座協力・他)

昨年は江東区の渉外学習講座で世界遺産の連続10回の講座を行なったが、本年もこうした社会に向けた事業を考えたい。また、現在日本ユネスコから、小・中学生向けの

世界遺産保全のテキスト作成の話も進行中であり、協力したい。(主査・羽生修二/全3名)

第3小委員会(歴史的建築物構造補強研究会)

アジアの歴史的建築物構造補強・文化財保存教育のネットワークづくりを検討したい。(主査・日高健一郎/全8名)

第4小委員会(世界遺産条約)

最近、日本国内ですでに登録された世界文化遺産を取り巻く様々な問題について、各地の市民、市民団体から様々な問い合わせ、意見などが日本イコモス国内委員会に寄せられている。中でも、奈良の平城宮跡については理事会での議論し、総会・シンポジウムで取り上げ、会員諸氏との議論を重ね、日本イコモスとしての意見を用意してきたところである。また京都に関しては、宇治の平等院、慈照寺銀閣についても、2002年度に地元の住民団体から問い合わせがあり、関西在住の理事が現地調査を行なっている。また、各地で登録を目指す運動、取り組みも増加し、日本イコモスへの期待、協力要請の機会が増加している。我が国の世界遺産条約批准からすでに10年がたち、国内の世界文化遺産の数も多くなり、登録からモニタリングへと国内委員会の役割も広がってきている。

このような状況の中では、条約とその履行指針の解釈並びに保存に関する諸制度について、その解釈と見解を求められる場合が多い。小委員会ではこれまでも、世界文化遺産の無形の価値、文化的景観に関する課題など、世界遺産の新たな課題の研究に取り組んできた。これに加え、国内個々の世界文化遺産の現場での課題についても研究を重ねる必要があると考えている。

2003年度は、上記の平等院、慈照寺などのケースについても個別の検討を重ねる研究会を持ちたいと考え、有志会員による現地調査とあわせて、小委員会を開催する準備をしている。(宗田好史)

第5小委員会

日本ブルガリア両国イコモス国内委員会の共同企画に基づく「プロヴディフ旧市街保存地区内文化財建造物修復事業」(Ancient Plovdiv Project)が、まだ正式決定ではな

いが、ようやく「ユネスコ文化遺産保存日本信託基金」(UNESCO/Japan Trust Fund)の供与対象として採択される運びになった。第5小委員会(現委員:石井 昭・金原保夫・麓 和善・前野まさる・矢野和之)は、理事会との緊密な連携を保ちつつ、引き続き当事業に関わる諸般の実務を担当する。

[事業計画] ユネスコが昨年(2002年)6月末に現地へ派遣したミッション(日本イコモスの石井・麓・ブルガリアイコモスのKrestev氏を含め、委員6人)の作業によって、同年9月末にユネスコ名の「事業計画書」が完成した。その要点は次の通り。(1)実施時期:2002年10月から3年間。(2)関与機関:ブルガリア政府文化省、国立文化財研究所プロヴディフ支所(国)、プロヴディフ市庁、プロヴディフ旧市街管理事務所(市)、日本ブルガリア両国イコモス国内委員会(NGO)、その他。(3)対象と予算請求額(単位米ドル):Georgy Klianty's House等3件(4棟)の本格修理に767,724、Nicola Nedkovich's House等5件(5棟)の応急修理に100,000、Bulgarian-Japanese ICOMOS Joint Working Groupの活動経費に117,000、合計984,724ドル。これにユネスコのサポートコスト(13%)を加算すると1,112,738ドル。

[活動方針] 上記「事業計画書」の内容をめぐって、現在、日本外務省とユネスコとの間で最終協議が進行中である。実施時期の遅延を含め、多少の計画変更が生じるかもしれない。当小委員会の本年年次活動方針はおおよそ次の通り。(1)正式決定の通知が届いたならば直ちに Bulgarian-Japanese ICOMOS Joint Working Groupの本格的活動を開始する。このWGは両国が保有する知識や経験の交流を図りつつ、調査研究、企画立案、指導助言、記録作成、学生・若手専門家のトレーニングなど、多様な実務に関与することになる。(2)WG内の日常的情報交換には主としてEメールを活用するが、少なくとも年間3回、「現地会議」を開く。当小委員会は予算配分上、1年につき延べ5人回の旅費、延べ100人日の滞在費を期待している。(3)第1回会議では、文化省、プロヴディフ市、旧市街管理事務所、等と協力する形で、設計監理者・施工業者の選定方法を審議し、設計監理者(複数を予定)については実際の選定まで進む。また、建物毎の基本的修復方針、3年間をカバーす



る工程表の策定なども、重要議題になろう。(4) WGの現地会議とは別に、年間1回、「国際調整会議」(International Coordination Meeting) が開催される予定であるので、当小委員会からも1~2名が出席する。この会議にはユネスコ、日本外務省の各代表をはじめ、事業計画書に示された全ての関与機関の代表者が参加する。我々は旅費節減の観点からWGの現地会議と同時期に開催するよう要望するつもりである。(5) 当小委員会の活動については、当然ながら、逐次、理事会で報告するとともに意見を求める。会員の皆様には JAPAN ICOMOS INFORMATION 誌を通じて適切な情報が届くよう努力したい。(石井 昭)

[国際専門分科委員会]

* Historic Gardens and Sites

- ①東ヨーロッパ水害救済支援の問題を検討したい。
- ② Historic Gardens のシンポジウムを計画したい。
- ③熊野古道のバックアップを考えたい。(杉尾伸太郎)

* Cultural Corridors

カルチュラルルートの独自性とコンセプトについて、ランドスケープとの相違を明らかにする。(杉尾邦江)

* Wood

文化財を未来につなぐ森林づくりのための有識者会議で、文化的建造物遺産の修理用材の保護を計画する会議を企画している。日本イコモス国内委員会もこの件について協力を願いたい。(伊藤延男)

* Cultural Tourism

先のマドリッド総会開催にあわせ、12月3日午後4時に委員会が開催され、13カ国13名の委員及びオブザーバーが参加した。先のメキシコ総会から今マドリッド総会までの期間中にオーストラリア・イコモス、ブルックス委員長がファックス等による選挙で選出されたため、本委員会でその任期を次期北京総会までとすることを定めた。また、改訂文化観光国際憲章制定(1999年)後、委員会の活動がやや停滞しつつあること、またエゲル・プリンシプルによって国際専門分科委員の任期が3カ年3期までとなっていることを懸念し、現在の

少数のアクティブな委員に加えるため、各国内委員会に新たな委員の選出の問い合わせをすることとした。委員会では引き続き、文化観光国際憲章の普及に勤める活動を続け、WTO(世界観光機関)との連携を強めることとし、また委員会ニューズレターの発行(第1号、2003年1月3日)を開始することとした。本委員会から、ポーランドの委員が正式に加わった。引き続き、翌4日WTOのF. フランジャツリ氏の参加の上で、イコモス文化観光国際専門分科委員会とWTOのジョイント・ミーティングが開かれ、ジョイント・プロジェクト「危機にさらされた遺産の救済、観光の役割(To Rescue of Heritage at Risk, the Role of Tourism)」について討議した。北京総会までの活動予定は、2003年9月にギリシャ・ロードス島で年次総会を開催することが決まっている。

尚、宗田は都合で本委員会を欠席したが、この報告は送付された資料(ニューズレター、2つの会議の議事録、プロジェクト概要書等)から作成した。(宗田好史)

* Stone

本年5月にアテネで会議があるので、日本イコモスとタイ/イコモスと協同でアジアの保存修復の会議を12月開催するように提案したい。(西浦忠輝)

* Vernacular Architecture

2004年に日本で Vernacular Architecture の会議を予定しているので、関係者とその計画を立てている。テーマは、「Sustainable Conservation System in Vernacular Architecture, Historical Villages and Towns」に決まった。

(前野まさる)



第13回ICOMOS総会および 国際専門分科委員会報告 (スペイン・マドリッド)

3) 2003年次予算 (2002/12/8 - 2003/12/7)

1. 繰越金	普通預金	194,967 円
2. 収入		
	2003年分会	2,400,000 円
	未納分会費	620,000 円
	維持会員会費	600,000 円
	普通預金利息	0 円
	定期預金利息	5,000 円
	事業費等収入	600,000 円
	寄付金	250,000 円
	雑収入	0 円
	合計	4,475,000 円
3. 支出		
	ICOMOS本部負担金	1,200,000 円
	会議費	120,000 円
	研究会費	100,000 円
	渡航費補助	0 円
	通信費	450,000 円
	印刷費	800,000 円
	事務用品費	80,000 円
	事業費	0 円
	事務局人件費	900,000 円
	合計	3,650,000 円
4. 残高	(繰越金+収入-支出)	1,019,976 円
5. 基金		
	定期預金 (イコモス研究振興基金)	12,550,000 円

1) 執行委員会・総会

西村幸夫

セビリアでの執行委員会 (2002.11)

イコモスの第13回総会が2002年12月2日から5日までスペイン・マドリッドで開催された。日本からも前野まさる会長はじめ10名を超える会員の方々が参加されたので、その模様は他の原稿に譲るとして(選挙のみ後述する)、ここではその前後に開催された執行委員会・諮問委員会の様子を報告することにしたい。

総会に先立って11月28日と翌29日にかけてスペイン・セビリアにおいて、イコモスの執行委員会ならびに諮問委員会が開催された。執行委員会はイコモスの正副会長、事務局長、監事、17人からなる執行委員による会議で、新しい国内委員会の承認や総会の内容の検討、3年間の活動計画の審議、イコモス会計のチェックなどを行なうものである。アジア関係では、マレーシアに国内委員会がないため、入会希望者がイコモス本部へ個人会員の申請してきたものを受け付けるというものや、台湾・台南にある国立文化財研究所がやはり本部へ組織としての会員 (Institutional membership) を申請してきたものを受け付けるということがあった。もつとも時間を費やしたのは来年に延期になったジンバブエ総会の件で、ジンバブエからの代表から進捗状況について報告を受けた。ジンバブエではその後さしたる政治的混乱もないようで、来年の総会は比較的穏やかな事態のもとで開催されることになりそうである。国の予算も張り付けられることが決まり、全体に準備作業は順調であるという印象を受けた。

マドリッドでの総会 (選挙結果のみ)

続く総会に関しては、選挙の結果のみ、報告することにする。選挙は総会の最終日である12月5日に行なわれたが、前回メキシコ総会での混乱を懲りて、機器類は使用しないこと、立候補者それぞれから開票にあたってオブザーバーをたてること、各テーブルごとに複数の国の代表からなる選挙監理委員が選ばれ、透明性を最大限追求するかたちで実施された。

会長選には現職のマイケル・ピツェット氏 (ドイツ) と現職の事務局長であるジャン＝ルイ・リュクサン氏 (ベルギー) が



立候補し、さらに事務局長職にレイ・ボンディン氏（マルタ）とデイス・ブンバル氏（カナダ）、ジル・ヌリシエ氏（フランス）が立つという混戦でスタートしたが、結果的には混乱なく、選挙を終えることができた。選挙結果は以下の通りである。（カッコ内が得票数。執行委員選以外は、得票数が過半数に達しない場合は第2回目の投票を行なう）

会長選： Michael Petzet (520・当選)、Jean-Louis Luxen (367)

事務局長選（第1回目）： Dinu Bumbaru (386)、Ray Bondin (365)、Gilles Nourissier (118)

事務局長選（第2回目）： Dinu Bumbaru (408・当選)、Ray Bondin (384)

監事選（信任投票）： Giora Solar (839・信任)

副会長選（第1回目）： Gustavo Araoz (米・500)、Christiane-Schmuckle Mollard (仏・462)、Sheridan Burke (豪・446・以上第1回目で当選)、Mohaman Haman (カメルーン・436)、Carlos Pernaut (アルゼンチン・410)、Yukio Nishimura (日本・409)、Nimal de Silva (スリランカ・257)

副会長選（第2回目）： Yukio Nishimura (463)、Calos Pernaut (391・以上当選)、Mohaman Haman (263)

執行委員選： Francisco López Morales (メキシコ・350)、Susanna Sampaio (ブラジル・344)、Axel Mykleby (ノルウェー・330)、Ray Bondin (324)、Tamás Fejérdy (ハンガリー・307)、Rosa Anna Genovese (イタリア・303)、Ana Paula Amendoeira (ポルトガル・279)、Nikos Agriantonis (ギリシア・274)、Boguslaw Szmygin (ポーランド・253)、Aimé Gonçalves (ベニン・240)、Abderrahmane Chofi (モロッコ・225)、Angela Rohas (キューバ・182・以上当選)、Mario Molina Carillo (141)、Maria Teresa Gaona (134)、Adda Gheorghievici (104)、

ただし、透明で公正な選挙を心がけた結果、選挙時間が大幅に伸び、最終的に選挙結果が全て確定したのは翌日の午前1時を回っていた。お昼前から選挙が始まっているので、14時間前後かかっていることになる。後日、これが問題となり、郵便での投票を含む選挙方式の見直しがその後の執行委員会の大きな議題となっている。

サラゴサでの執行委員会（2002.12）

総会后、場所をスペイン・サラゴサに移して選挙後初の執行委員会が開催された。議題は各委員の役割分担、残りの5名の執行委員の指名（規約により、地域バランス等によって5名の執行委員を指名することができる」とされている、これをco-opted memberという）、次期総会の準備、これから3年間の活動テーマなどである。当面この1年間は「無形文化財 intangible heritage」をテーマとすること、今年の4月18日の「遺産の口」のテーマは「水中文化遺産 underwater cultural heritage」とすることが決まった。

パリでの執行委員会（2003.3）

また、その後2003年の3月13、14日にパリで執行委員会があり、以下の4名が新たに執行委員に指名された。残り1名は南西アジアからアフリカ北部にかけてのアラブ諸国から人選することとした。

Zhang Bai (中国)、Maria Rosa Suarez-Inclan Ducassi(スペイン)、Mohaman Haman (カメルーン)、Augusto Villalon (フィリピン)

さらに、執行委員会終了後の3月15、16日の両日、2003年6月の世界遺産委員会にかけられる世界遺産の申請物件のイコモス内での評価委員会である世界遺産パネル（執行委員メンバーが担当）が開催された。ここでは、新規提出のほか、再提出や拡張などを含めて合計32件が審査された。このなかで今後話題となりそうなのは、北朝鮮から出されている「高句麗古墳」とイラクのアッシリア遺跡である「アシュール Ashur(Qala'at at Sherqat)」であろう。高句麗古墳に関しては高句麗国の発祥地である中国北東部にも同類の古墳が残っており、中国がジョイントのノミネーションを主張しており、現時点では今後の成り行きは不透明であるといわざるを得ない。

以上

2) 国際専門分科委員会

1. 歴史的庭園及び文化的景観

(イコモス・イフラ) 委員会

杉尾伸太郎

標記については2002年11月30日、12月4日の両日にまたがって開催されたのでその概要を報告する。

初日は名誉委員長であるフェリウの事務所兼自宅で行なわれた。ファーストネームにスペインのランドスケープアーキテクトらしいカルメンの名を有する彼女は、母、本人、娘と女性ランドスケープアーキテクト三代に及ぶ彼女らの住宅はチャームングであると同時に多くの秀れた質の蔵書等に囲まれた知的空間となっており、参加者にとってそのホスピタリティとともに満足感を得るに充分であった。

委員長のデ・ヨング、副委員長のザンゲリヤドーン、グッドチャイルド、モークリッジら14ヶ国の代表の他アメリカのニールがオブザーバーとして、またグリーツが書記として参加した。4日は上記の他3ヶ国が加わると共に、一部の人々は入れ替わってオブザーバー出席となった国もある。

今回はジンバブエの総会が役員選挙もあって急にマドリッドで開かれることとなったので、フェリウら関係者の努力等についての説明があった。

さらに一応は2003年にジンバブエでシンポジウムを国際的な約束に従って開かねばならないこと、当委員会の開催は2003年10月3～5日、ドイツのドレスデンに近いバートモスカウでの開催が決定していること、2004年モロッコ、2005年ノルウエイ、2006年イフラと共催でアメリカでの開催とスケジュールが述べられた。もし日本が希望するなら2007年以後であるが、それも早々に名乗りが必要であろう。

今年はリスクの下での遺産について話題が多かったのが特色であるが、とりあえず3月中にリストを、毎年秋にはレポートを提出するよう呼びかけがあった。昨年の水害で被害が多く庭園にダメージを与えたが、特にチェコのバロック庭園は被害が大きい。

また、ポルトガル、ポーランド、スイスなどでも問題が発生しているが、アメリカの国立公園局のように文化的景観の目録をつくったという報告もなされている。今後地域での活動を盛んにするためのアジア・パシフィック、アメリカ、アフリカ、ヨー

ロッパ・アラビック、の4地域に分けて活動することも全体の組織として議論されているようである。

ポストコングレスツアーはグラナダ方向を選んだが、参加者が少なくわずか4名であり、カナダの国内委員会副委員長のボネットと共に冬期工事中のアルハンブラ及びフェネラリーフェの庭園を視察した。

今回個人的に興味があり、特に視察したのはいくつかのカルメンと呼ばれる個人庭園である。大学の施設やレストラン、ホテル等に転用し、公開されているものは問題なく見ることができるが、全くの私人の庭をオフシーズンに見せてもらうことは難しい。

しかし、アルハンブラの展望地域であるアルバイシンの庭園は歴史的に見ても興味の対象である。

2. 文化の道委員会 (CIIC)

杉尾邦江

CIIC 委員会は2002年12月4日PM4時から夜半近くまで総会会場の大学のクラスルームで開催された。主たる議案は下記の2議案であった。

1. THE CONCEPTUAL AND SUBSTANTIVE INDEPENDENCE OF CULTURAL ROUTES IN RELATION TO CULTURAL LANDSCAPES をテーマにプレゼンテーションと討議

2. 新年度 (2003～2005) 今後3年間の役員改選選挙

1. THE CONCEPTUAL AND SUBSTANTIVE INDEPENDENCE OF CULTURAL ROUTES IN RELATIONS TO CULTURAL LANDSCAPE

本テーマについてのプレゼンテーションはカナダ、ペルー、日本、象牙海岸の各国代表及びスペイン (CIIC) 会長のマリア・ローザの5人が予め指名され本ミーティングで発表、討議される予定であったがペルー代表と私杉尾の二人のみのプレゼンテーションとなった。本題は文化の道は文化景観の範疇に入る遺産であると言う指摘に対して改めて此処で文化の道遺産の定義を確実なものとし、また、文化景観との関



係における独自性を明確にする事が課題であった。しかし今回は二人のみのプレゼンテーションが行なわれたのみで新年度役員選挙に時間を要し十分な討議をするに至らなかったが今回の短い時間の中でのミーティングで次の様な考察と報告がまとめられた。

1) 考察

① (Cultural routes) 文化の道はこれまでの文化遺産に対して新しい概念のアプローチを提案する。文化の道とはこれまでの本質的な概念を越える所の無形的、動的、無限の概念を意味する。

②文化の道は道に含まれる、例えばモニュメント、歴史的都市、文化景観等この様な文化的要素を通して生成されるものでもなく、限定されるものではなく、文化の道は移動や歴史的な脈絡によってもたらされる原動力であり文化的要素を永続させるものである。

③この事は論理的かつ科学的な厳密な視点にたつて“文化の道はlinear (線状) のあるいは、線状でない文化景観であると認められるものではない。それらが例え文化の道上に存在しようが、むしろ完全に異なった、あるいは地理的に隔離されているかそれぞれお互いに非常に離れているものである。

と文化の道を以上の様に定義した。

2) 宣言

イコモス13回総会に於いて文化の道専門委員会は次の様に宣言した。

Cultural routes (文化の道) は例えば、town、cultural landscape、sites 等の多くの文化的要素のある一部ではない。むしろこれらの要素が或る一つの統一体に結ばれる無形の歴史的精神に組み込まれるものである。

以上の2点は総会時のCIICの会合で認められ12月5日の総会でCIICの会長より宣言された。

2. CIIC 新年度役員選挙

選挙は事前に役員候補の推薦が行なわれ事前投票が成される筈であったが、一部メンバーの投票に止まっていたので当日投票開票が行なわれた。結果は次の通り。

- ① VOTING MEMBERS は 53 人、(1 国 1 人)
- ② 役員

- President : Maria Rosa Suarez-Inclan Ducassi (Spain)
 - Vice-President for Africa : Dosso Sindou (Ivory Coast)
 - Assistants : Aime Goncalves (Benin)
Mohaman Haman (Cameroon)
Edward Maetenga (Zimbabwe)
 - Vice-President for America : Guy Masson (Canada)
 - Assistant : Tamara Blanes (Cuba)
Carlos Mesen (Costa Rica)
Maria Teresa Gaona (Paraguay)
 - Vice President for Asia-Pacific Samith Manawadu (Sri Lanka)
 - Assistant : Sandy Blair (Australia)
Kunie Sugio (Japan)
Kinda Sati (Siria)
 - Secretary General : Rosa Anna Genovese (Italy)
 - Assistant : Todor Kretev (Bulgaria)
Ana Paula Amendoeira (Portugal)
Adda Gheorghievici (Romania)
- 他にアソシエイツメンバー 12 名 (9 ヶ国) が新規承認された。

3. トレーニングおよび危機管理委員会

稲葉信子

2002年12月2日から5日までスペインのマドリッド市で開催された第13回 ICOMOS 総会に出席しました。総会の議事及び西村幸夫氏の副会長就任については、会長を始め他の出席者の方から詳しい報告があるものと理解しております。ここでは私が出席した第5分科会(トレーニング)及び総会に並行して開催された二つの国際専門委員会(トレーニング及び危機管理)について簡単に報告させていただきます。

第13回 ICOMOS 総会第5分科会 (トレーニング) :

本分科会は、アルゼンチンの Carlos Pernaut 氏 (現副会長) が責任者となり、開催に先立って応募論文の検討などを行う学術委員会が組織され、プログラムの策定が進められました。筆者もこの学術委員会のメンバーを務めました。

メールでのやりとりによる委員会でしたので、実態はすべて Pernaut 氏が取り仕切られた分科会でした。

発表についてですが、発表論文は全部で12編、スペイン語が会議の公式言語として採用されたこともあり、南米からの発表が中心で、また会場からの発言もこれらの国からの発言が極めて目立った会議でした。発表内容については、多角化している保存の世界を反映して、大学教育における保存教育カリキュラムから、啓発を目的とする市民参加プログラムまできわめて多岐にわたり、従ってまとめの討議も難しかったのですが、しかし ICOMOS の役割として、保存教育に関する基準づくり、カリキュラム研究、人材を含むデータベース作成の重要性などが、共通して認識しておくべき事項として確認されました。また大学における保存教育が比較的充実している欧米や中南米と、ICCROM や UNESCO など国際機関が行う中短期の集団トレーニングに負っているアフリカとの違いも出席者の発言から浮き彫りになり、地域の実情に応じた柔軟な対応が必要であることも確認されました。

トレーニング国際専門分科委員会：

筆者が voting member を務めているトレーニング国際専門分科委員会は、12月3日に開催されました。委員会開催の主たる目的は、委員長他幹部メンバーの改選でした。投票の結果、委員長には Mihály Zádor 氏（ハンガリー）、副委員長に Jaroslav Kilián（スロバキア）氏及び Carlo Cesari（イタリア）氏、事務局長に Caspar Laffree 氏（オランダ）が選任されましたが、しかし Zádor 氏が本年2月3日に急逝され、委員長は現在空席となっています。

今回の改選にあたり、これまで長く委員長を務めてこられた Jukka Jokilehto 氏、及び事務局長の Joseph King 氏はいずれも継続の意思を示されませんでした。皆様もご存知の通り、両氏はいずれも保存教育を主たる業務の一つとする ICCROM の関係者（元職員及び現職員）です。トレーニングを本務としている ICCROM 職員が、ICOMOS の同種の委員会の委員長及び事務局長を務めることは、理にかなったようでもあります。しかし両組織の仕事の区別がつかなくなる欠点も生まれます。また、ICCROM が行なう中短期の集団トレーニングと大学における保存教育とは同じトレーニングといっても手法が異なり、ICOMOS の活動が前者に偏ることに

も問題があります。ICCROM 事務局長は前任そして現職とも、これらの事情を踏まえて ICOMOS のトレーニング委員会事務局を ICCROM 内に置くことに懸念を表明していました。しかしいずれにしても、委員会を活性化するためにも、幹部メンバーの交替はよかったことと思っています。

急逝された新委員長は、ハンガリーという国柄を反映してか古典的な保存教育、言いかえれば固い保存教育を目指されていて、懸念を示す委員もいないわけではありませんでした。しかし今はご冥福をお祈りします。後任についてはまだ事務局から連絡がありません。とりあえずは副委員長が職務を代行するものと理解しています。

今回のトレーニング委員会の主たる議事は選挙で、それだけで時間を消費してしまいましたが、しかし残りのわずかな時間を使って委員が近況報告を行なう機会がありました。米国の Gustavo Araoz 氏からは、大学で保存を学んだ学生の就職先がないことを嘆く発言があり、どこの国も同じと思った次第です。

危機管理国際専門分科委員会：

12月4日に開催された本委員会に、私は、益田兼房氏の代理として出席いたしました。本委員会は歴史が新しくまだ規約等も整備されていないところから、まずはこれらの整備が急がれるのですが、出席者の大半が私を含め投票権を持たないオブザーバーであったところから、今回の会合は、本委員会の今後の方向性を探る参加者の意見交換に留まりました。

文化遺産の危機管理については ICOMOS の他、ICOM、IFLA 及び ICA がメンバーとして加わる、文化遺産に関わる国際 NGO を横に東ねた危機管理に関するブルーシールド国際委員会（ICBS）がありますが、これと、本委員会との関係が議論の中心となりました。現在のところブルーシールド国際委員会には会長あるいは事務局長が ICOMOS を代表して参加しているとのことですが、危機管理を専門とする本委員会ができた以上は、本委員会が ICOMOS を代表すべきではないかという意見です。また現在本部が積極的に進めている「Heritage @ Risk」プログラムについても、本委員会との連絡調整がうまくいっていないことにも不満が表明されました。



しかしその後の本部役員選挙で、本委員会委員長の Dinu Bumbaru 氏が事務局長に選ばれましたので、これらが改善されることを期待しますが、しかし反対にさらに曖昧になってしまうのでしょうか。

4. 考古遺産管理運営国際委員会 (ICAHM)

岸本雅敏

ICAHM の 2002 年次総会は、12 月 3 日の午後 4 時からスペインのマドリッドで開催された。今回の総会は、他の専門分科委員会の多くがそうであったように第 13 回イコモス総会に付設して開催された。会場も同じく Escuela de Ingenieros de Caminos, Universidad Politecnica de Madrid だった。

参加国は、順不同でスペイン・イギリス・スイス・ロシア・イタリア・スウェーデン・スロベニア、アメリカ・カナダ・メキシコ、オーストラリア、アジアからはスリランカと日本。参加者はわずか 17 人である。

今回の年次総会はなんとか開催され事無きをえたけれども、実はそれに至るまでには理解しがたい空白の時間があった。イコモス総会の開催地が急遽マドリッドに変更された時点で、ICAHM 会議も当然その会期中に開かれるだろうと思われた。けれども開催通知は一向に届かない。しびれを切らして小野昭氏(Voting Member)と筆者は開催を促すメールを事務局長の Ellen Lee 氏(カナダ)あてに 8 月以降何回か送った。ごく簡単な開催通知がようやく届いたのは 11 月 1 日のことだった。さらに、「Agenda は近日中に送付する」とありながら、それが事前に届くことはなかった。12 月 3 日、不安を抱きながらイコモス総会の会場に臨んだが、受付で訊いても ICAHM 会議はその場所すら不明だった。幸い ICAHM のメンバーと出遭って、会場となる教室にたどり着くことができた。

会議は ICAHM 議長の Brian Egloff 氏(オーストラリア)の開会挨拶で始まった。それは会議開催に至るまでの不手際とそれによって混乱を惹き起こしたことに対する謝罪の弁に終始した。また、事務局長が欠席であることを断ったうえで、ミスの多いにわかづくりの Agenda をその場で配布し、自ら議

長を務めながら議事を進行した。しかも途中で会場から姿をくらまして 1 時間ほどしてまた現れるという軽業をやったのけ、会議の場はしらけにしらけた。Agenda にそって討議は一応進めたけれども、個々の議題に対して確実に決着をつけて前へ進めるというより、参加者が自由に意見を述べあったというのが実態である。しかも休憩なしの 3 時間ぶっ続けで。

会議を終始リードしたのは、イギリスの English Heritage に属する Christopher Young 氏とオーストラリアの Marilyn Truscott 氏の二人である。今回の参加者で 2000 年次総会に出席していたのもこの二人だったから、議事の連続性を考えると当然かもしれない。今回の年次総会は、ICAHM の運営と執行部の有り方に大きな問題のあることが露呈した会議だ。会議中、「ICAHM is not a democratic organization!」と率直に発言する人がいたことを最後にふれておきたい。



第13回イコモス総会とシンポジウムの感想

大河直躬

昨2002年のマドリッド総会は、イコモスの歴史の転換点になるだろうと予想されました。国際関係では、2001年の同時多発テロとアフガン戦争以後の最初の総会です。また、1965年のポーランドにおける第1回総会から半世紀近くを経過し、保存をめぐる社会条件が大きく変化しています。総会開催地がジンバブエから急速スペインに移されたことや、シンポジウムの主題が「インタンジブルな価値」から「グローバル化された世界における保存」に変更されたことも、それらを反映しています。

11月30日に成田を立ち、パリ経由で夜遅くマドリッドに着き、下町の地下鉄駅前のホテル・サントドミンゴに宿をとりました。航空機の機内もドゴール空港も閑散としていて、イラク情勢の緊迫を実感しました。ホテルは夜中まで賑やかな広場に面していて、佐々波秀彦・前野まさる・西村幸夫氏も同宿で、楽しい毎日を過ごしました。

12月2日・5日の総会と役員選挙は、他の方が紹介されると思うので省略しますが、予定時間の遅延とインフォメーション不足には開口しました。最終の決選投票で西村氏が副会長に当選されたのは大慶至極でした。今後のご活躍を期待します。総会前日や会期中の空き時間を利用して、近郊のトレドとエスコリアルを訪ねました。いずれも地下鉄駅から高速バスで1時間弱です。トレドの巨大なゴシック様式の大聖堂と町並みや、ハプスブルグ家の世界帝国の幻影を物語る巨大なエスコリアル宮殿は、市内のプラド宮殿とともに、スペインの歴史と建築を充分堪能させてくれました。

12月3日・4日の2日間に行なわれたシンポジウムは、Documentation, Protection, Conservation, Monitoring, Training, Public Awareness の6セッションに分れ、1日あたり3セッションの発表が、午前・午後の同時進行で行なわれました。私が参加した第3セッションは発表希望者が一番多く、さらに Doctrine と Practice に分けられ、私は午前の Doctrine 部門の2番目でした。1番目のポーランドのアンジェイトマチュフスキー氏の“*Toward a pluralistic philosophy of conservation*” は、このセッションの基調講演に相当するものでした。このセッションで一番関心を集めたのは、現イコモ

ス会長ミハエル・ベチェット氏の“*Anastylosis or reconstruction—the conservation concept for the remains of the Buddha of Bamiyan*”でした。その要旨は次のようです。

2001年3月のタリバンによるバーミヤンの大仏の破壊の後、2002年5月のカブールにおけるユネスコのセミナーでは、保存方針は、a、破壊後の状態のまま保存する、b、破壊以前の状態に復元する、の二つの意見に分かれた。後者の具体的方法としては、伝統的技法で岩盤を現状よりも深く彫りこんで復元、新材料（コンクリート等）による復元、レーザー光線による復元（光と音のショーに似たもの）等が提案された。

その後、ベチェット氏はドイツ外務省から50万ユーロの援助を得て、ユネスコの要請に基づく調査を行なったが、その目的は岩盤の固定の可能性の検討だったという。しかし氏は、世界遺産条約もベニス憲章も復元を全く排除するものではないことを強調した後、この現地調査の結果に基づき、アナスチローシスの方法による復元が唯一の適切な解決であると提案した。このアナスチローシスによって復元された像は、岩盤と少数のボルトで繋がれた鉄骨枠組みで補強されるので、背後の岩盤に残存する像は保存されるという。

この提案は、アナスチローシス復元案が先にあり、その妥当な理由を後で無理に組み立てたようなもので、それが現イコモス会長から提案されたことが参加者を驚かした。

私の発表は、“*Historic conservation now needs re-examination of its basic concepts*” と題して、現在の保存に関する基本概念と考え方の再考を提案したものです。対象に選んだのは、a、保存における一般大衆（非専門家）の位置づけ、b、遺産価値の根拠、c、記憶と保存の関係、d、地域と保存の関係、の4点で、これらが相互に密接な関係にあることも合わせて論じました。会場では発表時間が予定の半分の10分に短縮されたので、aとbについて主に説明しました。私のような考えはイコモスではまだ少数意見で、多くの人の理解は得られないと予想していましたが、休憩時間にロランド・シルバ氏（前イコモス会長、スリランカ）から good presentation と言われ、セッションのコーディネーターのジェノベーゼ女史（イタリア）や、旧知のトラスコット女史（オーストラリア）からも感謝や激励の言葉があったので、多少の理解は得られたように思いました。



他のセクションも聞きましたが、全体的に論点があまりに拡散しているように感じました。これは、保存の具体的課題が急速に多様化していることを反映するとともに、現在のイコモスが中心的な課題を十分に把握していないことを表しているのでしょう。

総会後のエキスカージョンは「ガウディのバルセロナ」を選びました。同行十数人で、佐々波氏も参加されました。佐々波氏は30数年前にバルセロナを訪ねられたことがあり、当時との比較を伺って大変参考になりました。一日目の6日は、歴史的町並みのなかの古い邸宅 Palau Moja の中にあるカタロニア文化庁を表敬訪問した後、グエル公園等。7日は、ホテルの近くにあるアパートメントの代表作カサ・パトリヨ、郊外のコロニア・グエルの教会、サグダラ・ファミリア教会等を訪ねました。いずれも観光客が溢れ、カサ・パトリヨでは、すでに朝8時過ぎに数百人が入場券の窓口に並んでいました。開門後は、公開されたアパートの内部も、奇抜な彫刻が並ぶ屋上も人々で満員でした。

以前のバルセロナを知っておられる佐々波氏は、グエル公園はデイズニーランドになってしまった、と評されました。私も、サグダラ・ファミリア教会の工事現場を蟻の列のように埋め尽くす人々の列を見て、同じような感想を持ちました。この工事を指揮されている建築家の誠実な説明に心からの敬服を感じましたが、工事場を巡っている人々は、テーマパークの会場のショーのように眺めているのではないか、と思いました。世界遺産に登録されている著名な文化遺産が、グローバル化されたツーリズムのなかで、そのような存在へと変わってゆく現実を改めて認識させられました。

帰国後に、資料を整理しながら今回の総会の意義を考えたのですが、いろんな難しい問題が生まれているな、というのが全体的印象です。その一端を以下に記します。

まずイコモスの社会的役割の明確な変化です。イコモスは第二次大戦後の復興が進む過程で、建造物や遺跡等の保存の専門家による、ユネスコ傘下のNGO的な国際組織として生まれましたが、その中心課題は学術的なものでした。しかし、現在の世界情勢のなかでは、他のNGOと同様に世界政治の一端に組み込まれざるを得ません。

特にユネスコによる世界遺産登録の専門的評価をイコモスが分担するようになってから、その傾向がはっきりしました。そ

れ以前もアスワンやポロブドールの保存で世界政治とかかわることがありましたが、それらはまだイコモスの周辺の問題でした。しかし、いまやバーミヤン大仏の修復のような世界政治と密接にかかわる問題に本格的に関係し、会長ベチェット氏が自ら競技設計提案のような発表を総会で行なう時代になりました。

二番目は、現代の最大の産業に成長したツーリズム、特にその中心をなす文化ツーリズムとの関係の密接化です。この文化ツーリズムは、毎日のテレビや新聞・雑誌で私たちが出会うように、巨大メディアにも繋がっています。現在の著名な文化遺産はもちろん、その修復工事や完成のための工事も、そのような連鎖から逃れることができません。

アフガニスタン政府はバーミヤン大仏の復元を強く望んでいますが、それは復元が難工事で、完成までに数十年かかっても、工事自身が貴重な観光資源になることを知っているからでしょう。おそらく今後1世紀以上続くと思われるサグダラ・ファミリア教会の工事場の光景が、バーミヤン大仏の修復工事の将来像を暗示しているように、私は感じました。

今回のシンポジウムの主題は、詳しくは「世界文化遺産のための戦略：グローバル化された世界における保存、原理・実際・視点」ですが、発表や討論に成果があったとは思えません。皮肉なことに、総会そのもののあり方が、文化遺産とイコモスの役割のグローバル化を明確に示したのではないのでしょうか。



イコモス第13回総会出席報告

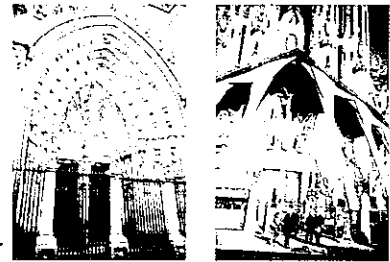
佐々波 秀彦

私は2002年12月1日～5日の間、マドリッドで開催されたイコモス第13回総会に出席しました。イコモスの会議に出席したのは今回が初めてだったので、ちょっと戸惑う事もありましたがすぐに馴れ、会長、副会長の役員選出にあたって、票の取りまとめにテーパーテイを設営したり、政治家も顔負けの選挙運動が、結構派手に行なわれ、投票も各役職毎に別々に行なわれたので、結局深夜までかかってしまった事など、洋の東西を問わず人間的な動きは似ている事を大変面白く思いました。さすがにこのような役員選挙方式は改革すべきだとの動議が提案どおり可決され、次回にはより公平で効率的な役員選挙が期待されます。

本総会は12月2日に、スペイン王妃が開会を宣せられ、科学シンポジウムは12月3-4日の2日間、次の6分科会に分かれて開催されました。第1分科会—記録、第2分科会—保護、第3分科会—保存、第4分科会—監視、第5分科会—訓練、第6分科会—認識 これらの6分科会の第1日目は1～3の分科会が、第2日目は4～6の分科会が同時並行的に開催されました。私は第1日目は第2分科会、第2日目は第6分科会に出席しました。

第2分科会の議題は文化遺産の保護で、これを法的規制、社会、経済、政治的側面、職業的立場からの検討、評価が、各国のメンバーから提出されたペーパーを中心に議論が行なわれました。本分科会で大河直躬氏は「歴史的建造物に対する基本的なコンセプトの再検討が今日要求されている」と題したペーパーを発表され、アジア、特に日本からのメッセージとして注目されました。

第6分科会の議題は文化遺産の認識に関するもので、変化しつつある社会の中で文化遺産をどう認識するか、よりよい保護や危険防止のための認識を高めるためにどのような手段をとるべきかなどにつき活発な討論が行なわれました。A.M.Carreno氏(ペルー)は自然環境と文化環境とを総合的に取り上げる事の必要性を指摘しました。Jeffrey Hou氏(米国)は具体的に把握できる物的施設と把握できない非物的要因(政治、社会、経済、文化)の保存につき、台湾を例にとって紹介されました。また、JohRoos氏(オランダ)は1738年、



左から
トレド大聖堂獅子の門
ガウディ サグラダファミリア

南アフリカのゲナデンダルに建設された宣教師館及び居留地の修復調査提案につき説明しました。アフリカの事例研究は今まであまり聞いた事がなかったので興味深く聞きました。特に当時開発された港町は奴隷貿易で賑わっていたと聞いて特に関心を持ちました。

本総会ではプレとポストのコングレスツアーが設営されていて、それぞれ4-5箇所の歴史的都市が選ばれていました。私はプレコングレスツアーには日帰りのトレドを、ポストコングレスツアーには3日間のガウディ建築研究(パロセロナ)を選びました。

トレドツアーには総勢70-80人が参加し、前野日本イコモス会長も合同されました。私はトレドには40数年前に訪問した事があり、東、南、西、の三方を川で囲まれた丘陵地に一際目立つ王宮と大聖堂の2大建築が聳え、急峻な崖とうまく連続して旧市街地を取り囲む城壁と、この地域への主要出入口として立てられたビサグラ新門により、この地域がコンパクトに一体化されている事に、大いに感銘を受けましたが、今回の訪問で40数年前の印象が文字どおりに再現された事は私にとって大変感慨深いものがありました。

パロセロナには米、独、ギリシャ、オーストラリア、台湾、日本から総勢10名が参加しました。日本からは大河氏も参加されました。2002年はガウディ生誕150年に当たるので盛大なイベントが全市を上げて行なわれたとの事です。私どもの案内は地元のイコモスグループが取り仕切り、きわめて精力的にガウディの諸作品を見て回る事ができました。どこでも多くの見物客が行列をつくっていましたが、私たちは特別待遇で、すぐ見学する事ができました。

ガウディの建築はサグラダファミリア聖堂に代表されると思います。40数年前訪問したときは訪ねる人も多くなく、今日の盛況ぶりは隔世の感があります。19世紀の後半ジョン・ラスキンが建築の7燈でといた「犠牲」を文字通りに体現したのがガウディの作品だと思います。21世紀が今後どのように展開するか中々予想が付きませんが、過去の文化遺産が秘めている人間の叡智から学ぶところはきわめて大きなものがあると思います。



ICOMOS マドリッドでの雑感

西浦忠輝

総会・シンポジウムは当初、ジンバブエのビクトリアホールで開催されることになっていたのですが、グレートジンバブエをはじめとするアフリカの石造遺跡の調査ができるのをかなり期待していました。会場がマドリッドに変更された時はがっかりしたというのが実はいつわらざる心境でした。しかし、すでにシンポジウムでの発表の準備をしていましたし、石造物国際専門委員会の副委員長という立場もあり、第12回のメキシコシティ大会をエスケープしたこともあって、参加を決めた次第です。

スペインは1984年と1990年に訪れていますが、マドリッドは84年以来18年ぶりでした。当時は物価も安く、のんびりしたいいい街だという印象でしたが、昨今は、治安が急激に悪化し、特に日本人にとってはヨーロッパで最も危険な都市とされているという情報にやや緊張しました。まあ、十分な警戒感と緊張感を持っていればたいていは問題ないわけで、マドリッド在住の日本人から「実際はかなり危険だけど、西浦さんなら大丈夫ですよ」と言われて、妙に納得した筆者でありました。

18年ぶりのマドリッドは、予想以上の発展ぶりで、地下鉄でどこでも行ける便利な街になっていました。以前に比べて中南米系の人が増えたように思いますし、地下鉄内では確かに緊張感があり、犯罪が増えていることが感じられました。そこで私は安全策として、日本人ではなく中南米出身者の振りをすることにし(地で十分いけるのです)、深夜に地下鉄も利用しましたが、滞在中安全に過ごせました。

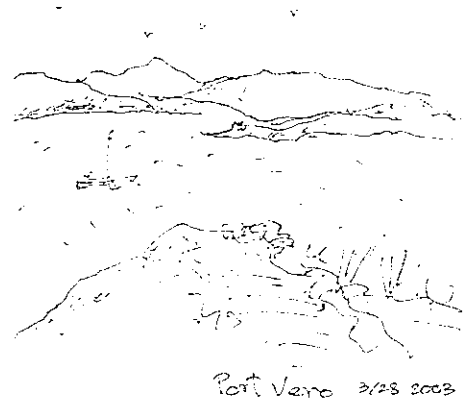
プレ・エクスカーションではトレドを訪れました。18年前に比べて観光地としての整備は進みましたが、町並みそのものは基本的に変わっていませんでした。ただ、車の通行量が大幅に増えた印象があります。中世の町並みですので道は狭いわけで、この点が課題の一つと感じました。個人的には、小雨模様の中、前日の暖かさにだまされて薄着で出かけたので寒かったのが堪えました。

シンポジウムは12月3～4日に6つの部会に分かれて、1日に3部会ずつ行なわれました。筆者は主に第3部会(Conservation)に出席し発表も行なったのですが、下記に

示す通り、部会によって発表件数が大きくことなるにもかかわらず、平等に1日ずつの割り当てであったため、きわめてタイトなスケジュールで、筆者に与えられた時間はわずか6分間でした。もとより時間割通り進行するはずもなく、大幅な遅れの中、筆者としてはパワーポイントを用いて6分間で手際よく発表できたと思っています。後日、知らない米国人から「おまえの発表が一番よかった」と言われました(時間超過した多くの発表者への皮肉を込めてということでしょう)。選挙の時の有り余る退屈な時間(他の人の報告にあると思います)を思うと、複雑な心境にならざるを得ません。他の部会では、十分な質疑応答や討議が行なわれていて、うらやましく感じた次第です。今後の課題として欲しいものです。

各部会の発表件数：

第1部会(Documentation) 11、第2部会(Protection) 12、第3部会(Conservation) 30、第4部会(Monitoring) 13、第5部会(Training) 12、第6部会(Awareness) 15



お知らせ

「日本遺跡学会」設立される

2003年2月1日、奈良文化財研究所講堂にて設立総会が開催され、「日本遺跡学会」が設立の運びとなった。

「日本遺跡学会」とはなんぞや、何をやる学会であるのか、については“設立趣意書”と“当面の活動テーマ”をご覧ください。

要するに現代のわれわれが遺跡とよりよく共存、共生してゆくにはどうしたらいいのかを考える学会だと思う。日本には約44万か所の遺跡がある（2001年文化庁調査データ）。遺跡の時代も旧石器から近代におよぶ。しかもこれらの遺跡の大半は現在でも土地利用の容易な平坦地や丘陵にあるから、必然的に現代の開発対象地に入ってくる。われわれは否応なしに遺跡、すなわちわれわれの祖先の生活地と同じ場所で生活せざるを得ないのである。そこでは毎年1万件近い発掘調査が行なわれ、消滅していく遺跡も数知れないのであるが、保存されている遺跡もおおむね多い現状である。なかには土地が公有化され、遺跡公園として市民の活用に使われている幸せな遺跡もおそらく500か所を越えているのであろう。

しかし、そこに問題がないわけではない。

“当面の活動テーマ”はそのうちのいくつかである。遺跡の登録制度の問題、開発計画との調整、発掘調査のあり方、保存整備の内容、現代社会における遺跡の位置づけ、整備された遺跡の管理や運営の問題、遺跡と観光や地域おこしとの関係、などさまざまな問題をわれわれは抱えている。

遺跡に関わるこれらの問題の解決策を探るには広範な学問領域の人々の協力が求められる。また、これは行政担当者、研究者だけの問題ではなく、遺跡と直接接する市民の問題でもある。

「日本遺跡学会」はそのための研究発表、討論、情報交換、交流の場である。であるから、この問題に関心がある人、この問題でどうしたらいいかと思いついている人、遺跡とよりよく共存、共生したいと考えている人、すべての人に参加していただきたい学会である。

そもそもこの種の学会をつくらうと言いだしたのは坪井清足（元興寺文化財研究所所長）、高島忠平（佐賀女子短期大

学教授）、石井則孝（帝京大学教授）の各氏である。学会設立の準備を引き受けたのが奈良文化財研究所である。そのため、奈良文化財研究所埋蔵文化財センターが2000年度から2002年度まで3か年かけて設立準備のための“研究集会”を積み重ね、なんとか学会の形に漕ぎつけたところである。ただし、ここまでは奈良文化財研究所の研修業務の一環として行なってきたのであるが、学会設立後の運営は奈良文化財研究所の業務ではなく、あくまでも学会の仕事はボランティア活動として取り組むということである。正直に言って、この学会が今後どのような方向に進んでゆくのかはまだ誰も分からない。ただし学会であるから、志しを同じくする人の単なる集まりではないのであろう。活発な研究、意見交換、交流が行われ、遺跡がいまきと現代社会の中で存続するシステムをつくるための母胎に「日本遺跡学会」がなれることを念願している。

去る2月1日の設立総会には130名あまりの人が集まり、現在（2003年2月22日）230名ほどの方が会員になっていただいている。裏方を引き受ける事務局としては大変なのであるが、さまざまな分野からより多くの人に参加していただき、有意義で、かつ楽しい学会をつくり上げていきたいと考えている。

「日本遺跡学会」設立趣意書

遺跡は確かな過去を一つ一つの事実として内包している。それらの遺跡を理解することによって、人間の歴史を構築し、これによって人間社会のあるべき未来に見とおしを持つことが可能となる。

考古学等におけるこれまでの遺跡に対する研究は、遺跡から出土した遺物に関する研究に重きが置かれ、遺跡や遺構そのものに関する研究はやや遅れた感をまぬがれなかった。わが国においても遺跡の発掘調査、保存、活用については、相当の歴史があり、試行錯誤を経ながら、一定の成果を上げてきている。しかし、遺跡の多様な内容や価値が十分に反映されないまま、遺跡の保存、整備が実施される例も散見される。また、遺跡の発掘調査にたずさわった人たちの遺跡に対する思いや感動が、必ずしも遺跡の保存、整備に反映されているとはいえない面もあった。さらに、現代社会における遺跡のあり方に対する理論的、方法的検討も十



分になされてきたとは言い切れない。

このような状況をふまえ、われわれは今一度初心に戻り、現代社会の中で遺跡とは何か、遺跡をどのように保存・活用するかを、学際的、国際的なレベルで研究し、ひいては遺跡の本質と、現代あるいは将来におけるあるべき姿を体系化していく必要がある。そのため、遺跡をとおしてさまざまな分野の人たちが情報交換、研究、交流する場として「日本遺跡学会」を設立する。

「日本遺跡学会」 当面の活動テーマ

- ・ 現代社会における遺跡のもつ意義を多角的に考える。
- ・ 遺跡の発見から保存に至る道程を事例に沿って調査し、遺跡保存に向けた考え方、方法を考える。
- ・ 遺跡の保存、整備を前提とした発掘調査等のあり方を考える。
- ・ 遺跡を生涯学習に活かすにあたっての考え方、方法を考える。
- ・ 遺跡の整備、管理、活用の現状を調査し、成功点、反省点を分析し、日本の遺跡の望ましいあり方を考える。
- ・ 遺跡を地域の都市計画、土地利用計画、観光計画などにいかに位置づけるべきかを考える。
- ・ 遺跡を活かした地域おこしの事例を調査し、望ましいあり方を考える。

なお、現時点の学会の中心役員は設立時の暫定的なものであるが、会長：牛川喜幸（京都橘女子大学教授）、副会長：和田晴吾（立命館大学教授）であり、事務局は当分の間、独立行政法人文化財研究所、奈良文化財研究所に置く。入会希望、学会への問い合わせなどは下記までご連絡下さい。多数の参加をお待ちしております。

「日本遺跡学会」 事務局

住所：〒 630-8577 奈良市二条町 2-9-1
 奈良文化財研究所 文化遺産研究部 遺跡研究室
 電話：0742-30-6816
 ファックス：0742-30-6815

(高瀬要一)

US イコモスの Gustavo Araoz 氏 からのメール イラク戦争関連の記事2編 (New York Times 2/25 より)

Oldest Human History Is at Risk

By HOLLAND COTTER

Iraq has hundreds of thousands of archaeological sites. Some 10,000 have been identified, but only a fraction have been explored. Any of them could change what we know about human history, as past excavations have done. Some have already revealed the world's earliest known villages and cities and the first examples of writing.

The country is also one of the prime centers of Islamic art and culture. It is home to some of the earliest surviving examples of Islamic architecture -the Great Mosque at Samarra and the desert palace of Ukhaidar - and it is also a magnet for religious pilgrimage. The tombs of Imam Ali and his son Hussein, founders of the Shiite branch of Islam, at Najaf and Karbala, are two of the most revered in the Muslim world.

During the Persian Gulf war in 1991 at least one major archaeological monument, the colossal ziggurat of Ur, was bombed. Shock from explosions damaged fragile structures like the great brick vault at Ctesiphon, and the 13th-century university called the Mustansiriya in Baghdad. These are among the sites most at risk from war:

(略)

"If any of the holiest Shiite shrines at Karbala, Najaf or Kadhumain are hit, we can only expect a very angry reaction from Muslims everywhere," said Zainab Bahrani, who was born in Iraq and teaches Islamic art at Columbia University. "It would be like bombing St. Peter's in Rome."

(<http://www.nytimes.com/2003/02/25/arts/design/25SITE.html>)

War in Iraq Would Halt All Digs in Region

By JOHN NOBLE WILFORD

War in Iraq would halt archaeology not just in that country

but across the Middle East, experts say, and could result in some of the earliest cities of Mesopotamia being bombed or looted into ruins of ruins.

Researchers with long experience in Iraq say they are worried that postwar looting could cause even more damage to the antiquities than combat. They also fear that some art dealers and collectors might try to take advantage of any postwar disarray and change in government to gain access to more of Iraq's archaeological treasures. After the Persian Gulf war of 1991, ancient treasures were plundered and sold illegally in international markets.

Fear of war has already had a widespread effect. All European research teams left Iraq months ago, indefinitely suspending excavations along the Tigris and Euphrates Rivers at places like Uruk, Assur, Nimrud and Nineveh. Others doubt that they will return this year to dig sites in Syria, Jordan and some places in southern Turkey. In many cases it is impossible to get insurance for staff and students. Researchers in Egypt are growing wary, and nascent plans for reviving long-suspended operations in Iran have been abandoned.

(略)

Leading archaeologists and representatives of cultural groups have conferred with officials of the State and Defense Departments, stressing the importance of compliance with the 1954 Hague Convention on the Protection of Cultural Property in the Event of Armed Conflict. The treaty obligates combatants not to target cultural sites and monuments except where military installations have been placed on or next to them. The United States signed but did not ratify the treaty.

At the invitation of the Pentagon, archaeologists have provided military planners with the locations of hundreds of Iraq's outstanding ruins from antiquity. But the entire country, experts say, is an archaeological site. "We've gone about as far as we can go," said Dr. McGuire Gibson of the University of Chicago, one of the archaeologists who met with Pentagon officials. "We reminded them that there are no natural hills in southern Iraq, and if you see a hill, in most cases it's the mound of a buried ancient settlement."

(略)

In a recent article in the journal *Science*, William Pearlstein, the council's treasurer, was quoted as saying that the group favored "a rational and balanced approach to cultural heritage issues" and that if war came it hoped to encourage the American government to establish "a sensible post-Saddam cultural administration" and relax some of Iraq's strict antiquities laws. Archaeologists and art collectors alike agreed that their greatest concern is looting after a war. In the Persian Gulf war of 1991, damage to known ancient sites was slight, but looting afterward left museums and excavations in a shambles. Assyrian sculptures in northern Iraq were sawed up so the pieces could be taken out of the country, archaeologists said. Unexcavated sites in the south were bulldozed by plunderers, who hauled away artifacts in dump trucks. One expert said a diplomat's car was stopped crossing the border from Iraq into Jordan with 80 illicit artifacts. The expert would not say what country the diplomat was from.

Although some looters were poor people in need, experts said, others could have been part of organized international operations. Dr. John Malcolm Russell of the Massachusetts College of Art in Boston said that in the last decade "a flood of many thousands of undocumented Iraqi antiquities has been surfacing on the market, visible at every level of the market from the big auction houses to eBay." Dr. Russell concluded, "They can't all come from Granny's attic and old Swiss collections." Fearing that looting could be worse after another war, the Archaeological Institute of America has called on the "appropriate governments" to help protect museums and sites and to help the Iraqi authorities rebuild museums and enforce laws against plundering.

The experience in Afghanistan has been sobering, Dr. Russell said. The United States has provided little money for cultural reconstruction and protection there, he said, adding, "Afghanistan must be like a gold field for looters."

(<http://www.nytimes.com/2003/02/25/arts/design/25DIG.html>)



ICOMOS 本部より (2003年2月20日付け)
4月18日は世界遺産デー!
INTERNATIONAL DAY FOR MONU-
MENTS AND SITES
2003年のテーマ: Underwater Cultural Heri-
tage

The International Day for Monuments and Sites は1982年4月18日に始まり、文化遺産の多様性やそれらの保存への取り組みを広く一般に知らせ、積極的な参加を促すために設けられました。ここ3年間、すべてのイコモス国内委員会が参加できる特定のテーマを設けています;2001年は Save Our Historic Villages、2002年は20th Century Heritage、そして本年は Underwater Cultural Heritage。このテーマは国連による「2003年 水の国際年」と関連しています。

水中文化遺産 Underwater Heritageも他の文化遺産同様、世界の各地で危機的な状態にあります。巨額な経済的利潤がからんだり、巨大な機材によって水中で秘かに進められたりして、大きな関心を呼ぶことはありますが、それに対応する法制度が十分に整備されていなかったり、効力がなかったりしています。この種の遺産の価値に対してまったく関心が無いうえ、市民にとってその所有権を維持する重要性も理解されていません。水没した都市遺跡、先史の人々が使った交易路、聖域、沈没船などは、地上の遺跡ではもはや見いだすことのできない情報を提供してくれるもので、我々が共有すべき遺産の一部なのです。1996年、イコモスでは水中文化遺産の保存と管理に関する国際憲章を批准し、それは2001年11月のユネスコ総会に取り上げられました。水中文化遺産に関するイコモス専門委員会(ICUCH)はこのユネスコ条約成立のために精力的かつ有能に取り組んできました。

4月18日を記念して、イコモスは各国内委員会、各国際専門委員会ならびに各会員に対して、海・河・湖などに沈むすべての水中文化遺産の保全・保護を推し進め、イコモス憲章ならびにユネスコ条約をプロモートするための諸活動を企画するよう願っています。

詳しくは、以下のイコモス・ウェブサイトまで:

www.international.icomos.org/18April2003.htm

(広報担当:山田)

日誌 事務局

(2002年11月19日～2003年2月28日)



2002年

- 11 / 18 ICCROMより Newsletter September 2002 を受領
- 11 / 18 CANADA/ICOMOSより Dinu BUMBARU氏が ICOMOS Secretary General に立候補するので、サポートをよろしく頼むとのメールを受領
- 11 / 19-20 KOREA / UNESCO・KOREA/ICOMOS共催の「伝統的・歴史的建築の保存問題に関するアジアの国際会議」に前野まさる委員長が出席
- 11 / 25 UNESCOより、The World Heritage News Letter No. 36 August - September - October 2002を受領
- 11 / 27-29 ICOMOS 執行・諮問委員会（於：セビア）に前野まさる・西村幸夫両氏が出席
- 12 / 1-5 第13回 ICOMOS 総会及びシンポジウム（於：スペイン・マドリッド）に、前野まさる委員長はじめ西村幸夫、大河直躬、佐々波秀彦、杉尾伸太郎、杉尾邦江、西浦忠輝、稲葉信子、岸本雅敏(国際専門分科会のみ)の9氏(順不同)が参加された。(大河直躬・杉尾邦江の両氏はシンポジウムで発表された)
- 12 / 11 財)文化財保護振興財団より、2003年度の助成金申請用紙を受領
- 12 / 15 [JAPAN ICOMOS INFORMATION] 第5期6号を発行 維持会員を含む全会員および関係団体に順次送付
- 12 / 18 Gustavo ARAOZ氏 (US/ICOMOS) より2003年の Internship の件で委員長宛にメールを受領(委員長が対応)
- 12 / 18 US / ICOMOS より NEWSLETTER No. 3 July - September 2002 を受領
- 12 / 19 (社) 日本ユネスコ協会連盟よりユネスコ/UNESCO 2003 Vol. 1083 を受領
- 12 / 25 パリ本部スタッフ一同より ICOMOS のすべての会員に宛てた年末のご挨拶メールを受領
- 12 / 25 ICOMOS 委員長に再選された Michael PETZET 氏より、第13回 ICOMOS 総会の成功と選挙への協力のお礼と Season's Greeting をメールで受領

2003年

- 1 / 8 パリ本部より、2002年提出の資料(会員名簿)に基づいた会員カード及び2002年の名簿を受領(この名簿を基に昨年の入会者を含む新しい名簿、住所変更会員の住所変更、退会者のカード等を本部に送付する)
- 1 / 13-17 2002年1月現在在籍の日本イコモス会員に、会員カードと会員費納入お願いの文書を送付
- 1 / 11 日本イコモス国内委員会 2002年次第4回拡大理事会を開催(於東京術大学講義室)
- 1 / 11 日本イコモス国内委員会 2002年次総会及びシンポジウム開催(於東京術大学講義室)
- 1 / 17 US/ICOMOS International Symposium [Managing Conflict & Conservation in Historic Cities: Integration Conservation with Tourism, Development & Politics] (Annapolis, Maryland, April 24-26 / 2003) の案内を受領
- 1 / 17 「アンコール遺跡保存事業連絡協議会メンバーの活動状況報告」2002年分を作成し、内閣官房副長室へ送付
- 1 / 22 「世界遺産教材キットの作成」会議を、文化財保存計画協会(恵比寿)で開催
- 1 / 24 ICCROMより「Architectural Records, Inventories, Information System and Conservation (2003/9 / 22 - 10 / 17) ICCROM/ROME) の開催通知とプログラム詳細を受領
- 2 / 7 (財) ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所より「なぞの巨石文化を考えるー東西の先史時代の跡を比較してー」(3 / 21 於奈良県新公会堂) の案内とチラシを受領
- 2 / 7 メキシコ国立人類学歴史研究所より、「災害時における文化財保護に関する国際会議」(2003年4月於メキシコ、ユカタン州メリダ市で開催) に日本イコモスから専門家派遣要請のメール受領(前野委員長が対応)
- 2 / 7 HUNGARY / ICOMOS の president より、ICOMOS Scientific Committee on Training (CIF) の委員長 Mihaly ZADOR 氏が2月3日に逝去されたとのメールを受領(稲葉信子氏が対応)
- 2 / 18 東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センターの稲葉信子氏より、研究会「イギリスの新しい文化財保護の動きーロンドンの都市景観保存から町並み再生事業まで」(2003 / 3 / 10 於東京文化財研究所会議室) の案内を受領
- 2 / 18 BRAZIL/ICOMOS より、本年2 / 15に開催された第12回年次総会で Maria Adriana Almeida Couto de CASTRO 氏が委員長に再選されたとの報告のメールを受領
- 2 / 24 UNESCOより The World Heritage Newsletter No. 37 November - December 2002 / January 2003 を受領
- 2 / 28 パリ本部に2002年次中の住所変更及び2002年中に入会された会員の登録、退会者のカード返却等の書類を送付

●日本イコモス国内委員会 理事会 JAPAN-ICOMOS EXECUTIVE BOARD

President	委員長	前野 まさる	Masaru MAENO		
Trustees	理事	稲葉 信子	Nobuko INABA		
		上野 邦一	Kunikazu UENO		
		岡田 保良	Yasuyoshi OKADA		
		杉尾伸太郎	Shintaro SUGIO		
		田中 哲雄	Tetsuo TANAKA		
		田原 幸夫	Yukio TAHARA		
		日高健一郎	Kenichiro HIDAKA		
		藤本 強	Tsuyoshi FUJIMOTO		
		益田 兼房	Kanefusa MASUDA		
		町田 章	Akira MACHIDA		
		松本 修自	Shuji MATSUMOTO		
		宮川 朝一	Asaichi MIYAKAWA		
		宗田 好史	Yoshifumi MUNETA		
		矢野 和之	Kazuyuki YANO		
		山田 幸正	Yukimasa YAMADA		
		吉田 鋼市	Koichi YOSHIDA		
		Auditors	監事	石澤 良昭	Yoshiaki ISHIZAWA
				木原 啓吉	Keikichi KIHARA
		Advisors	顧問	石井 昭	Akira ISHII
伊藤 延男	Nobuo ITO				
坪井 清足	Kiyotari TSUBOI				

小委員会 WORKING GROUPS

Chiefs	主査	藤井 恵介	Keisuke FUJII
		羽生 修二	Shuji HANYU
		日高健一郎	Kenichiro HIDAKA
		宗田 好史	Yoshifumi MUNETA
		石井 昭	Akira ISHII

●国際諸委員会参加者 REPRESENTATIVE TO INTERNATIONAL COMMITTEES

Executive Committee	西村 幸夫	Yukio NISHIMURA
Advisory Committee	前野 まさる	Masaru MAENO
Specialized Committee on:		
Archaeological Management	小野 昭	Akira ONO
Structures	岸本 雅敏	Masatoshi KISHIMOTO
	日高健一郎	Kenichiro HIDAKA
	坂本 功	Isao SAKAMOTO
Historic Towns and Villages	西澤 英和	Hidekazu NISHIZAWA
	福川 裕一	Yuichi FUKUKAWA
Underwater Cultural Heritage	上野 邦一	Kunikazu UENO
	荒木 伸介	Shinsuke ARAKI
Training	稲葉 信子	Nobuko INABA
Historic Gardens and Sites	工楽 善通	Yoshimichi KURAKU
	杉尾伸太郎	Shintaro SUGIO
	本中 眞	Makoto MOTONAKA
Vernacular Architecture	前野 まさる	Masaru MAENO
	大野 敏	Satoshi ONO
Wood	村上 裕道	Yasumichi MURAKAMI
	伊藤 延男	Nobuo ITO
	松本 修自	Shuji MATSUMOTO
Earthen Structures	渡邊 保弘	Yasuhiro WATANABE
	岡田 保良	Yasuyoshi OKADA
Cultural Tourism	宗田 好史	Yoshifumi MUNETA
	石井 昭	Akira ISHII
Legal Issues	河野 俊行	Toshiyuki KONO
Photogrammetry	西村 康	Yasushi NISHIMURA
Cultural Corridors	杉尾 邦江	Kunie SUGIO
Stone	西浦 忠輝	Tadateru NISHIURA
Risk Preparedness	益田 兼房	Kanefusa MASUDA



JAPAN ICOMOS INFORMATION

Vol.5, No.7 30 APRIL 2003

日本イコモス国内委員会 委員長 前野まさる

事務局担当理事 矢野和之 編集 山田幸正

〒150-0021 東京都渋谷区恵比寿西1-9-6 アストウルビル3階

株式会社 文化財保存計画協会 気付

Tel & Fax .03-5728-1621 e-mail jpicomos@kb4.so-net.ne.jp

JAPAN-ICOMOS OFFICE

c/o Planning Institute for the Conservation of Cultural Properties

Asutouru Bldg.,1-9-6 Ebisu-nishi Shibuyaku Tokyo 150-0021, Japan

Tel & Fax .+81-3-5728-1621 e-mail jpicomos@kb4.so-net.ne.jp